

## 調査の概要

## 瀬戸市の結果

### 1. 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査の対象 小学校第6学年、中学校第3学年の児童生徒

### 3. 調査内容

#### (1) 教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

- ・主として「知識」に関する問題
- ・主として「活用」に関する問題

#### (2) 生活習慣や学校環境に関する質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

4. 調査方式 悉皆調査

5. 調査日時 令和4年4月19日（火）

## 教科に関する調査 結果報告

## 小学校

瀬戸市内小学校の「成果（◎）」と「課題（▲）」

平均正答率（％）	全国	愛知県	瀬戸市
国語	65.6	63.0	◎登場人物の相互関係を、描写を基に文中から読み取る事ができる。 ▲自分の考えが明確に伝えることや、相手の読みやすさを考えて表現することに課題がある。
算数	63.2	63.0	◎示された場面にあった求め方を考え、理由を書き表すことができる。 ▲百分率で表された割合を分数にして表すことに課題がある。
理科	63.3	61.0	◎実験から得られた情報を基に、実験の方法を見直し改善することができる。 ▲実験結果から得られた新たな問題を分析し、自分の考えをもつことに課題がある。

瀬戸市内中学校の「成果 (◎)」と「課題 (▲)」

平均正答率 (%)	全国	愛知県	瀬戸市
国語	69.0	69.0	◎正しいことばの意味や表現の技法を理解したり、同じ技法を使った表現を選択したりすることができる。 ▲自分の考えを分かりやすく伝えるために、表現を工夫することに課題がある。
数学	51.4	54.0	◎証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解し示すことができる。 ▲データから傾向を読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題がある。
理科	49.3	51.0	◎分子モデルで表した図を基に化学反応式で表すことができる。 ▲状態変化とそれによっておこる身近な現象を結びつけて考えることに課題がある。

各教科で課題として挙げた内容と、市内各校での分析結果をふまえ、今後も児童生徒の興味・関心を高めながら、基礎的・基本的能力の確実な定着を目指していきます。



### 調査結果から

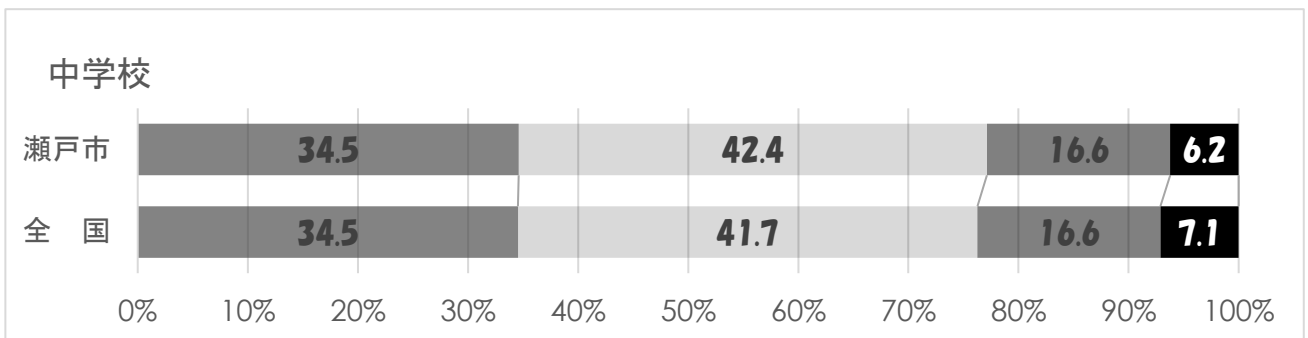
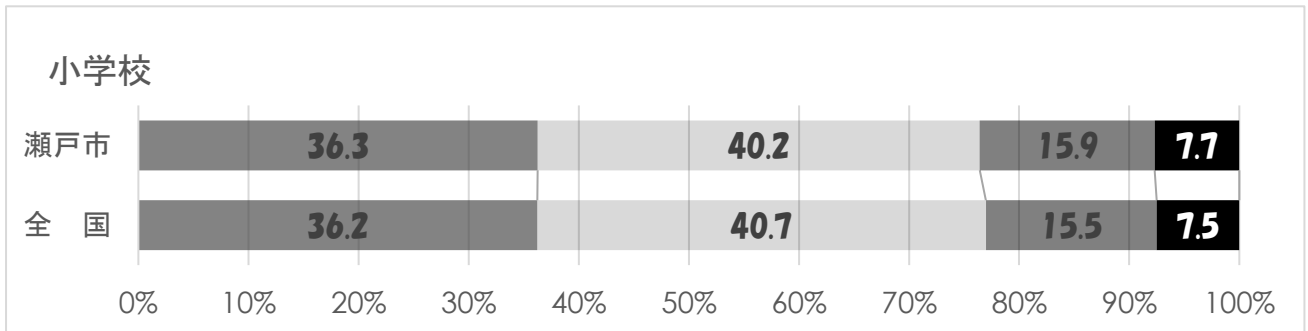
- 子どもの良いところを認め、こころに充足感が得られるように温かく見守っていきましょう。
- 本にふれたり、本から学んだりする機会を大切にするとともに、デジタル端末との上手な付き合い方を考えていきましょう。
- 住んでいる地域や社会のことを考えるようなきっかけをつくっていきましょう。



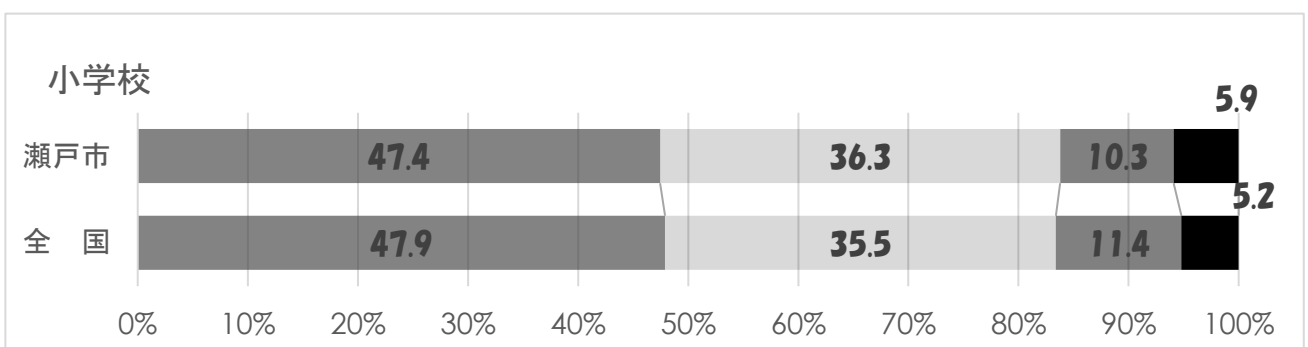
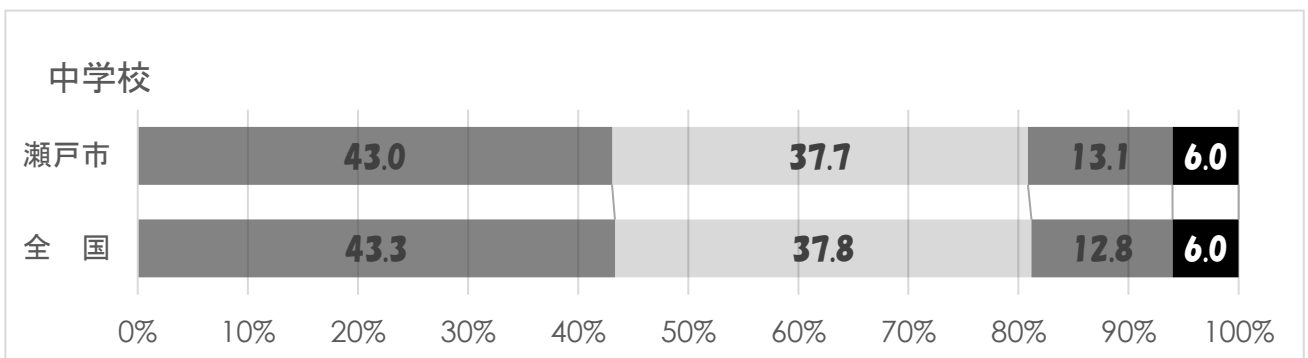
★グラフは、左から「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」を示しています。

### 子供達の意識

◇自分には、よいところがあると思いますか

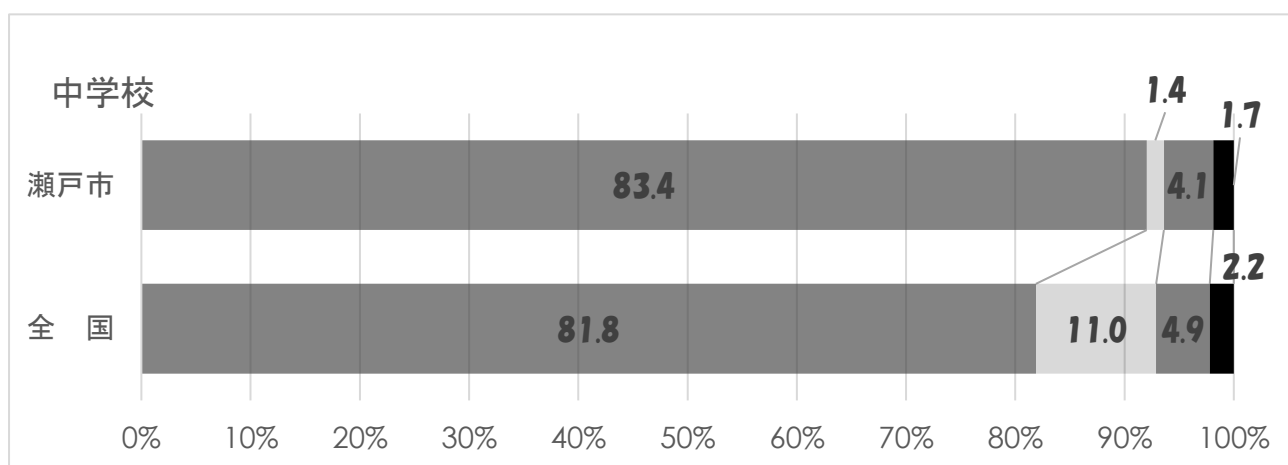
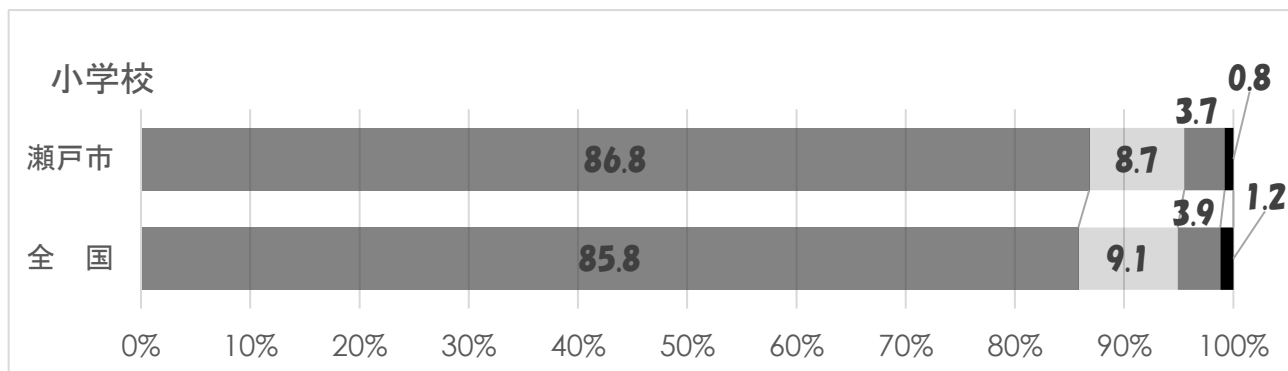


◇学校に行くのは、楽しいと思いますか

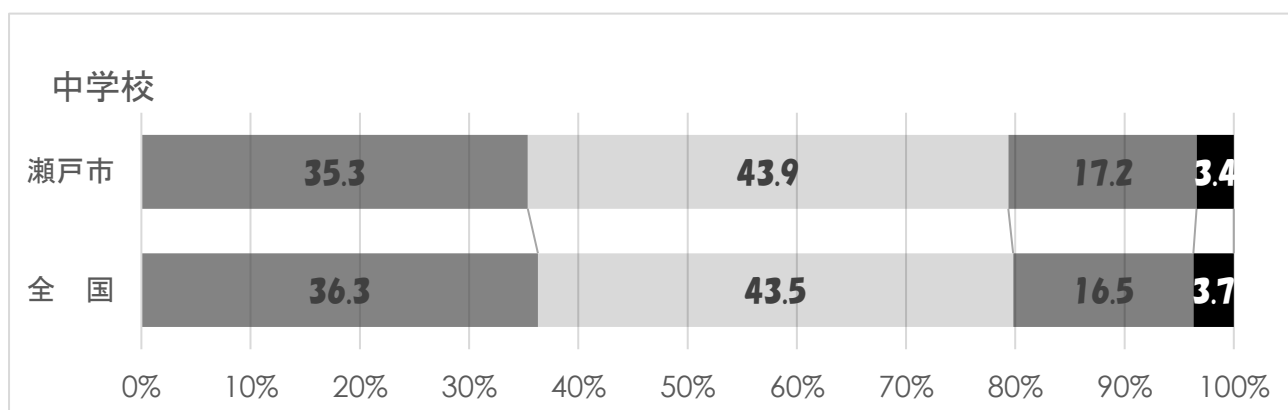
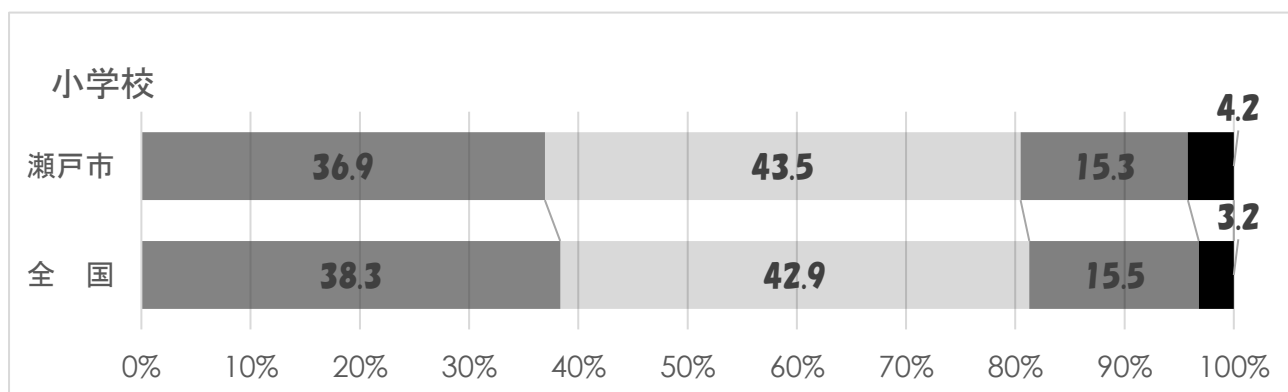


## 基本的生活習慣

### ◇朝食を毎日食べていますか

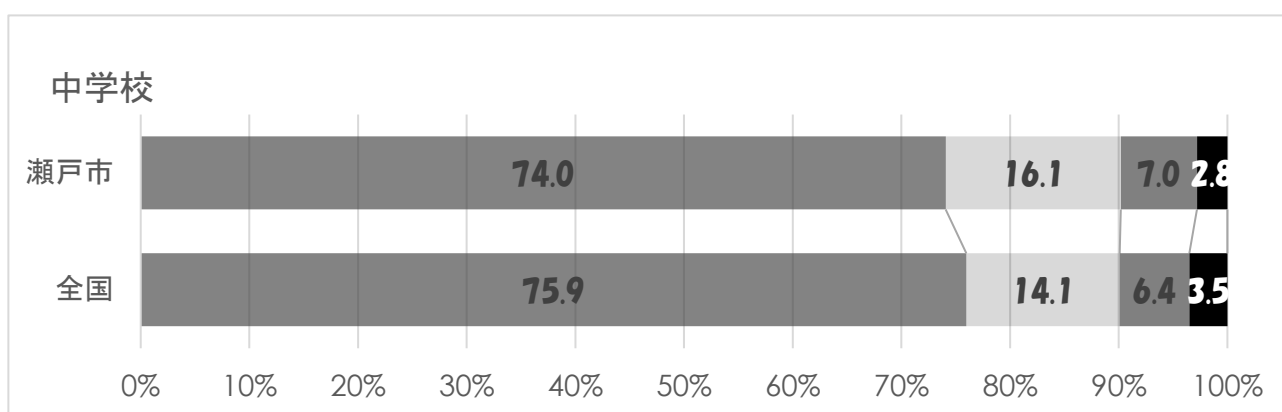
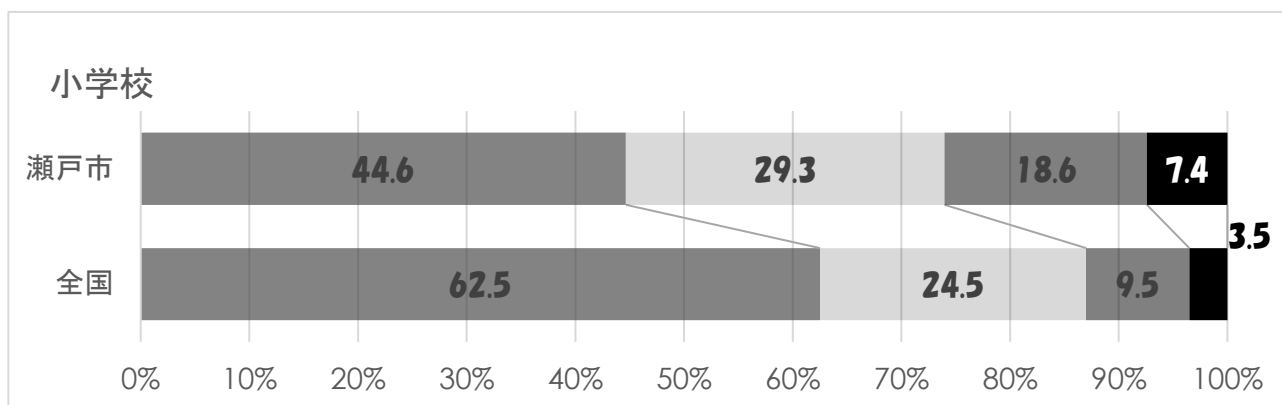


### ◇毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか

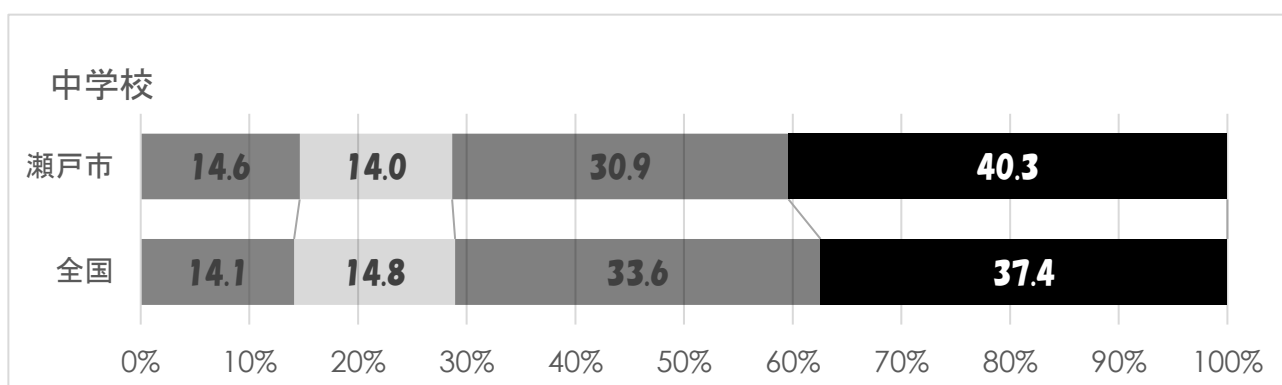
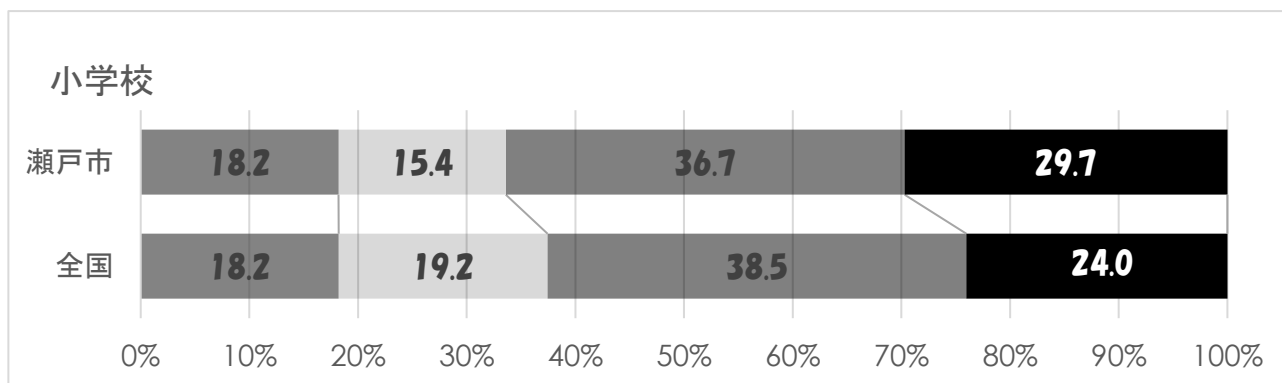


# 学習習慣

## ◇家で、学校の予習・復習をしていますか

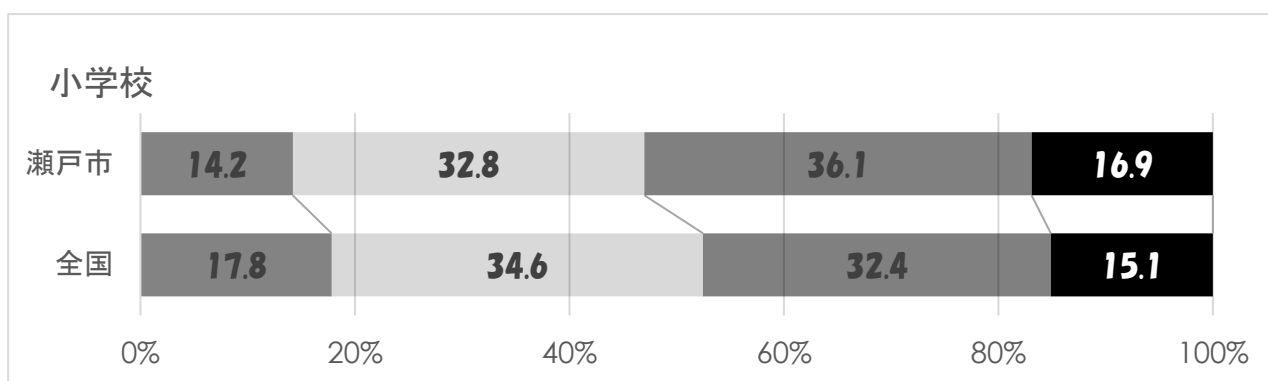
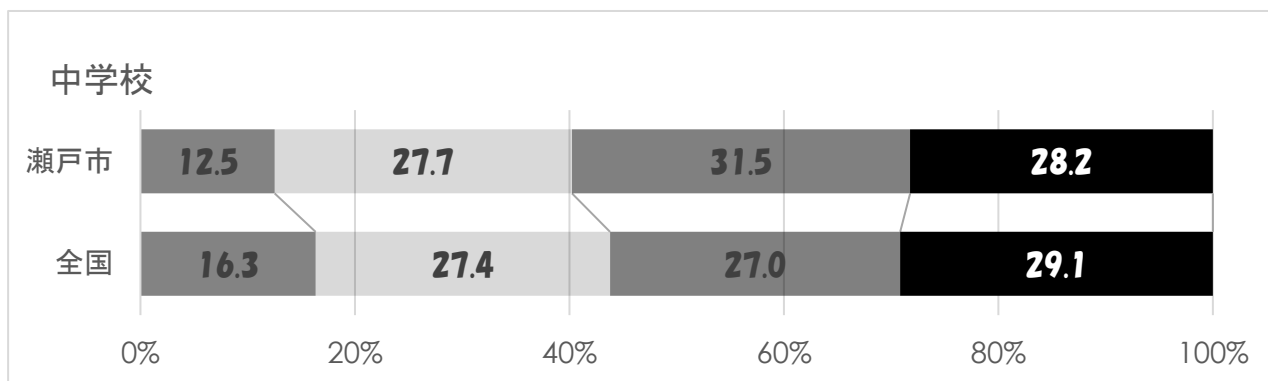


## ◇家で、読書はしていますか

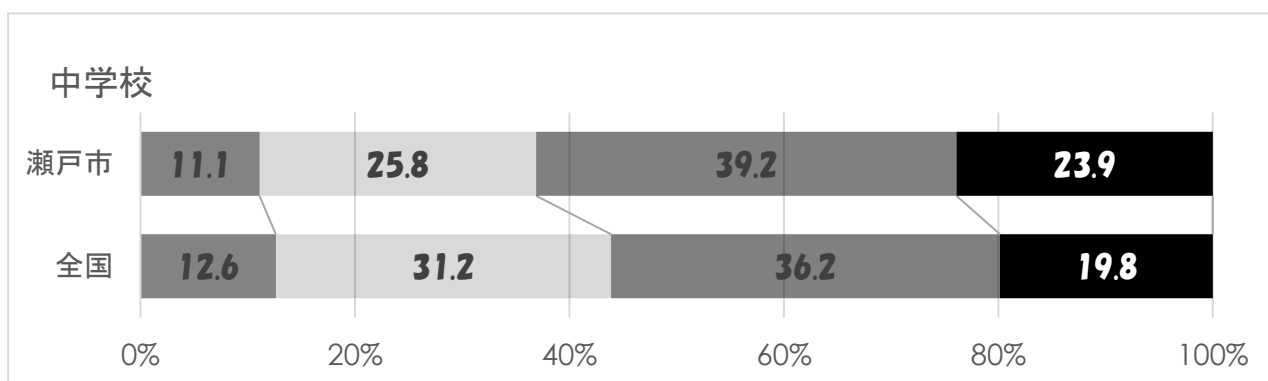
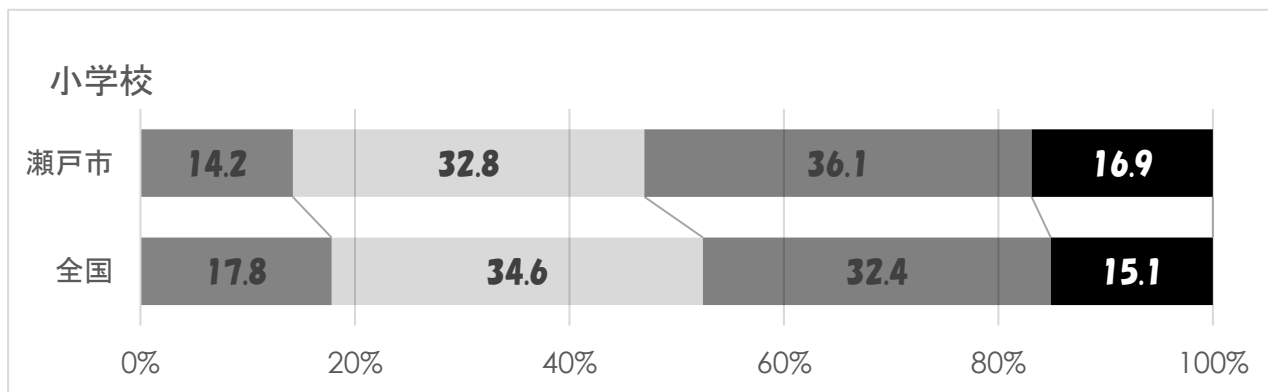


## 地域や社会との関わり

◇今住んでいる地域の行事に参加していますか



◇地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか



## 【瀬戸市内小中学生の「よさ（◎）」と「課題（▲）」】

※令和3年度全国平均と比較し検証しています。

### 子どもたちの意識

◎自分には、よいところがあると思う児童生徒の割合は、令和3年度と比べて高くなっている。

▲困難なことに挑戦しようとする気持ちが小学生に比べ中学生が低くなっています。学年が上がるごとに直面する課題が大きくなり、解決に難しさを感じるが多くなっていることがうかがえます。

### 基本的な生活習慣

◎スマートフォンやコンピューターの使い方について家族と約束したことを守れる児童生徒の割合が令和3年度に比べて高くなっています。

▲朝食を毎日食べている児童生徒の割合は、令和3年度と比べてやや低くなっており、栄養バランスの偏りや生活習慣の乱れが心配されています。

### 学習習慣

▲家で、読書をしていない児童生徒の割合は、令和3年度に比べて高くなっており、読書離れが懸念されています。

▲家で、授業の予習・復習をしたり、計画的に学習したりできる児童生徒の割合が、令和3年度よりも低くなっており。

### 地域や社会との関わり

▲今住んでいる地域の行事に参加している児童生徒の割合は、令和3年度と比べて低くなっています。

▲地域や社会をよくするために何をすべきかを考える児童生徒の割合も、令和3年度よりも低くなっています。長引くコロナ禍による地域との交流の減少が要因と考えられています。

子どもたちがやりたいことに出会い、自ら挑戦しようとする事ができる環境づくりが必要です。学校と家庭・地域の連携により地域全体で子どもたちを支え、子ども達を温かく見守っていき、そんな環境づくりを進めます。

学習面では、仲間と関わり合いながら課題を解決する力「協働型課題解決能力」の育成を進めます。この力があらゆる困難に立ち向かう原動力となると考えます。また、地域や社会への関心を高め、子ども達が地域や社会と積極的に関わり合えるよう、「郷土愛の醸成」を進めます。

